

プラマーナの定義

——プラジュニャーカラグプタの解釈をめぐって——

小 野 基

はじめに

ダルマキールティ (Dharmakīrti, ca.600–660) の主著 *Pramāṇavārttika* (=PV) *Pramāṇasiddhi* 章冒頭の「プラマーナ」(*pramāṇa*, 知識手段) の二つの定義句を勝義的プラマーナ (*pāramārthikapramāṇa*) と世俗的プラマーナ (*sāṃvyavahārikapramāṇa*) の定義と呼んだプラジュニャーカラグプタ (*Prajñākaraḥ*, ca.750–810) の解釈は夙に有名で、先行研究によって度々言及されてきた。だが、この解釈の意味は従来まだ正確には解明されていないように思われる。本稿は、*Pramāṇavārttikālaṃkāra* (=PVA, PVAo) の叙述に即してプラジュニャーカラの解釈の成立過程を跡づけ、その真意を解明することを目的とする。

ダルマキールティの「プラマーナの定義」

PV の *Pramāṇasiddhi* 章冒頭では「プラマーナとは整合性のある知である (1ab': *pramāṇam avisamvādi jñānam* = 第一定義)。整合性とは目的実現に定まっていることである。…あるいは、未知の实在を明らかにするものである (5c: *ajñātārthaprakāśo vā* = 第二定義)」と説明されており、デーヴェーンドラブッディ (*Devendrabuddhi*, ca.630–690) 以来、註釈者たちはこの叙述をプラマーナの定義と見なした。しかし、定義が或る概念を一義的に規定するものである以上、二つの定義句からなるこの叙述は説明を要する。これを解釈する方法には幾つかの選択肢があり得るが、*vā* を連言的に理解し二つの定義句を組み合わされた一つの定義とみる発想は少なくともインドの註釈者たちにはなかった。現実に存在したのは、①二つの定義句を全くの同義語と理解すること、②一方の定義句が真の定義で、他方は派生型と理解すること、③二つの定義句が二つの異なったプラマーナに関する定義であると理解すること、の三通りの解釈である。やや結論を先取りすれば、デーヴェーンドラが①、ダルモッタラが②であったのに対し、プラジュニャーカラ

(96)

プラマーナの定義 (小 野)

は②と③の折衷的立場であったと考えられる。

デーヴェーンドラブッディとダルモータラの解釈

デーヴェーンドラは5c句に対する註釈で上述の二句を定義と呼び、二句の関係を論じる (cf. PVP(P) 6b1-4)。彼は「未知の实在を明らかにするものも別の第二の定義である」と述べており、二句の各々を独立の定義と見なしたと理解できる。但し、彼は「未知の实在を明らかにすること」によって規定される知が目的実現に関して整合的であると言い、その根拠を定義中の「实在」(artha) という語に求めている。「实在」= 事物は目的実現能力を特質とするものであるから、デーヴェーンドラは事実上、第二定義の中に第一定義の内実である「目的実現に定まっている」という特質が含まれると理解していることになる。だが彼は、後述のプラジュニャーカラとは異なり、第二定義のみが十全な定義であると述べようとしたわけではない。二句各々を独立の定義とするデーヴェーンドラには、ダルモータラやプラジュニャーカラとは異なり、一方の定義句に定義を収斂させる意図はない。しかし、二つの定義は、同一の概念に関する独立の定義である限りで同義語でなければならず、結果的に相互に他方を演繹し得ることになる。

他方、ダルモータラ (Dharmottara, ca.740-800) は、PV には註釈していないものの、Nyāyabinduṭīkā (=NBT) で「正しい知」(samyagjñāna) (=プラマーナ) を「整合的な知」(avisamvādaḥ jñānam) と説明しているので、事実上 PV の第一定義をプラマーナの定義と見做していると理解できる。また彼は、正しい知の一般的な特質を記述する文脈で「整合性」から「未了解のものを対象領域とする」(anadhigataviṣaya) という性質を導出しており、事実上第一定義から第二定義を演繹している。ダルモータラにとっては、第一定義が本来のプラマーナの定義であり、第二定義はその派生型、ということになるだろう (cf. NBT 17,1-19,4; Franco 1997: 51-52; 木村 1997: (6))。なお、ダルモータラは世俗的なプラマーナについてのみ語っている、という点に留意すべきである。

プラジュニャーカラの解釈

序論部分と第一定義の導入

以上の二人の註釈者の見解を踏まえ、プラジュニャーカラの解釈を検討する。まず第一定義に関しては、この定義の説明が導入される文脈に注意せねばならない。第一定義導入直前の PVA 冒頭 (PVAo 1,10-2, 8) は論全体の序論とも称すべき

重要な箇所であるが、プラジュニャーカラはそこで *Pramāṇasamuccaya*vṛtti (=PSV) 巻頭の記述を長々と援用して、ディグナーガが PSV 帰敬偈で用いた世尊の形容句 *pramāṇabhūta* を自身の体系の根本概念に位置づける (cf. 小野 2013). 彼は、その際、適宜文章を付加してディグナーガの記述を改変しており、付加部分を検討することで、この箇所のプラジュニャーカラの論述意図が明らかになる。

まず彼は、「この論書では（世尊への）讃嘆偈の提示が論書の冒頭にある」という PSV の文言に、「（世尊が）論書の（著述）目的だからである。この（論書）では *pramāṇabhūta* である世尊こそが論証される」と加える。PSV 帰敬偈で「（知としての）プラマーナ」の確立が著作目的であると表明したディグナーガとは対照的に、プラジュニャーカラは *pramāṇabhūta* である世尊こそが PVA の著作目的だと言うのである。また彼は、「原因とは意志と実践における完成である」という PSV の文章を引用した直後に、世尊の原因面での完成は「世俗的プラマーナ (*sāṃvya-vahārikapramāṇa*) に依拠して」と付け加える。世俗的プラマーナとは元来、ダルマキールティが *Pramāṇaviniścaya* 第 1 章末尾で、勝義的プラマーナ (*pāramārthikapramāṇa*) に対照させる形で、直接知覚と推理を意味して用いた概念である (cf. PVin 44,2-6). 従って、この世俗的プラマーナに依拠する世尊の原因面での完成とは、勝義的プラマーナたる世尊の完成に他ならない。後に問題となる世俗的プラマーナ・勝義的プラマーナという対概念の片方が、ここに登場している点に注意したい。さらに、プラマーナの定義の導入に至る末尾の箇所では、プラジュニャーカラは「プラマーナとは世尊に他ならない (*eva*)」と、世尊こそが「真実の」プラマーナ (*pramāṇabhūta*) であるという *pramāṇabhūta* の新解釈を示唆した上で、「それに関して（ダルマキールティは）一般的にプラマーナの定義を説く」と述べて、第一定義を導入する。

以上の検討から、プラジュニャーカラが、PVA 冒頭で世尊を直接知覚と推理というプラマーナよりも根源的な真実のプラマーナと位置づけ、さらにそれを潜在的に勝義的プラマーナと等置させた上で、第一定義を真実のプラマーナである世尊を含むプラマーナ一般の共通の定義として解釈する、という文脈が明らかとなった（註釈者ヤマーリも PVA の第一定義の解釈を総括する箇所で、「以上の議論によって「整合性」が世俗と勝義の両プラマーナに共通の定義であることが確立された」と述べている。Cf. Y(P) 268a5-6). ここでは、第一定義「整合的な知」は、プラマーナ一般にとっては定義である一方で、「真実のプラマーナ」つまり特別のプラマーナである世尊にとっては必要条件に留まることが暗示されている。

(98)

プラマーナの定義 (小 野)

第二定義の解釈

次にプラジュニャーカラの解釈の核心部分である 5c 句に対する註釈を検討する。プラジュニャーカラは第二定義を導入して、次のように述べる。

あるいは、未知の实在を明らかにするものである。むしろ (atha vā) これがプラマーナの定義である。(…中略…) 他方、世俗知 (= 概念知) は、未知の实在を明らかにするものではない。すなわち (最初の直接知覚により) 既に把握されている色形等がそれ (= 概念知) によって別個に概念的に認識されるのだから (概念知は) 何ら未知の实在を明らかにしない。しかし人は (自らの) 主観的信念 (pratīti) を反省しないので、それ (= 既に把握された色形等) を (未知の实在と) 同一視する。(反論:) もしも整合性なしに「未知 (の实在) を明らかにするもの」がプラマーナならば、二つの月等の形象を持つ (知) もプラマーナになってしまう。(回答:) 否。「实在」という表現のゆえに、すなわち、それ (= 二つの月等の形象) は实在ではない。(PVAo 78,9-16)

まず、プラジュニャーカラが、デーヴェーンンドラとは異なり、5c 句の中の vā を atha vā と解釈していることが注意される。atha vā には、より良い選言肢を示す接続詞の意味があるが、以下の叙述を見る限り、この atha vā は正にそのような意味 (= 「むしろ」) で用いられていると見てよい。プラジュニャーカラは 5c 句の解釈に先立ち、これが第一定義よりも優れた定義であるとの見解を暗示するのだ。では、なぜ 5c 句が優るのか。彼はさしあたり、その理由を第二定義が概念知を排除し得る点に求めている。彼はまた、上述のデーヴェーンンドラと同様に、第二定義が単独で定義なら錯覚もプラマーナになる、との反論を想定した上で、定義中の「实在」の語が非实在をプラマーナの対象から排除するので、そうはならないと言う。これにより、第二定義は概念知と錯覚をともに排除し得る十全な定義であることになり、単独では概念知を排除できない第一定義に優ることになる。

しかし、このような「实在」の語の解釈は、5c 句は第一定義の派生型となり別の定義とは言えなくなる、との反論の余地を生む。次の箇所はこの問題を巡る応答から始まる。

(反論:) 实在性は (知が) 整合的である場合に限って認識されるのではないか。そして、それゆえ、この「整合的な知」こそが定義だから、どうして (5c が) 別の定義であろうか。(回答:) 否。なぜなら含意によって導出された (5c における整合性) は定義ではない。(…中略…) (反論:) 事物性はそれ (= 定義) に直接的にも間接的にも寄与しないが、整合性は实在性を認識させるのに寄与する (という意味で定義に間接的に寄与する)。(回答:) それは正しい。だが「未知の实在」という表現は既に把握されているものを把握する (概念) 知を排除できるが、「整合性」という表現には (でき) ない。それ (=

概念知)にも、整合性が認められるから、また、整合性によって実在性は知られない。たとえ(概念知が)整合的であっても、(概念知の認識対象である)世俗的諸存在が実在であることは証明されないから。(反論:) その場合、実在性はどのように認識されるのか。(回答:) 反省知に基づくと考えるべし。(PVAo 79,1-14)

プラジュニャーカラによれば、「整合性」は確かに「実在性」に含意されるのだが、それを理由に5c句を第一定義の派生型とすることはできない。問題は「整合性」と「実在性」の包摂関係である。デーヴェーンンドラも述べたように実在である限りは整合性があるので、「実在性」から「整合性」は演繹される。他方、世俗的存在(saṃvṛtisat)は整合的であっても実在とは限らない。外界の対象を虚構する概念知は、日常的には整合性を有しているが、それだけでは外界の対象の実在性が証明されたことにはならない(cf. Y(P) 340b2-3)。従って、「実在性」は「整合性」によっては知られず、「整合性」から「実在性」は演繹されない。この場合には、第二定義がプラマーナの本来の定義であり、他方、第一定義はその派生型となる(cf. 岩田 2000: 8; Y(P) 340b6-7)。これは、さしあたり、ダルモータラとは逆の立場である。

しかし、ここに新たな難問が生じる。プラマーナの定義としての「整合性」は、その内実が「目的実現が定まっていること」であるから、目的実現の有無によって定義が該当するか否かは経験的に検証できる。他方、「未知の実在を明らかにするもの」がプラマーナの定義である場合には、「対象の実在性」がプラマーナの要件であるが、整合性から演繹されない「対象の実在性」は経験的に検証できない。プラジュニャーカラは「実在性の認識は反省知(parāmarśa)に基づくと考えるべし」と述べるが、反省知は日常レベルでその存在が担保されるものではない。

勝義的プラマーナと世俗的プラマーナの定義

冒頭で述べた勝義的プラマーナの定義・世俗的プラマーナの定義の二分法は、正にこのアボリアに直面したプラジュニャーカラによって提示されるのだ。

むしろ、ここでは「実在」という語は勝義の実在(paramārtha)を言う。「未知の実在を明らかにするもの」とは勝義の実在を明らかにするもの、という意味である。そして勝義の実在とは不二性であり、プラマーナはそれを明らかにするものに他ならない。そして、これに対応して(ダルマキールティは)「それ自身は自らによって知られる」(PV II 4d)と述べ、また(第一定義に対応して)「真は行為を介して」(PV II 5a)と述べた。その場合には、後者(=第二定義)が勝義的プラマーナの定義であり、前者(=第一定義)は世俗的(プラマーナ)の(定義)である。(PVAo 79,15-19)

(100)

プラマーナの定義 (小 野)

整合性を俟たずに第二定義の中の「實在」がプラマーナ一般の対象を指すとすれば、そもそも人は或る知の対象が「實在」であることをどのように知るのか、という難題が生じるかも知れない。しかし、実はこの定義の中の「實在」という語が意味するのは勝義の實在としての不二性、つまりプラマーナとしての世尊の認識対象に他ならないとプラジュニャーカラは解釈する。そして次に、PVの「それ自身は自らによって知られる」と「真は行為を介して」の両句を引用し、これらを各々勝義的プラマーナと世俗的プラマーナに関連づける。

4d句と5a句の引用は一見唐突だが、プラジュニャーカラの狙いは、4d句「それ自身は自らによって知られる」を自律的真の叙述、また5a句「真は行為を介して」を他律的真の叙述と理解した上で (cf. PVAo 65,4-5; Y(P) 330a7-8), 前者を勝義的プラマーナに関連づけることによって、第二定義を勝義的プラマーナの定義と見做す論拠にすることにあると思われる。すなわち、或るプラマーナが勝義的プラマーナであれば、それは自律的に真であり、それゆえそれは経験的な検証を俟たない第二定義で定義できるが、他方で他律的に真が確定される世俗的プラマーナは、経験的検証の契機を含む第一定義によって定義されねばならない、というのが、この箇所叙述の意味であろう。こうして、第二定義が、勝義的プラマーナの定義となり、翻って、世俗的プラマーナにとっては第一定義が定義と位置付けられる、という解釈が、プラジュニャーカラの最終見解となる。

だが、見逃してはならない点は、この解釈においても、第二定義から第一定義を演繹できるというプラジュニャーカラの従前の見解は堅持され、従って第一定義は勝義的プラマーナの必要条件として残っている、という点である。これは上述のPVA序論部の検討が暗示していたことでもある。勝義的プラマーナは整合性のある知に他ならない。つまり、「第二定義が勝義的プラマーナの定義である」という言明は、正確には「第一定義を含意する第二定義が勝義的プラマーナの定義である」という意味に理解されねばならない。そして、そうであれば、これとは対照的に「第一定義が世俗的プラマーナの定義である」ということも、「第二定義を含意する第一定義が世俗的プラマーナの定義である」という意味に理解すべきかも知れない。もしそうであれば、プラジュニャーカラは、世俗的プラマーナに関する限り、ダルモークタラと同意見となる。

おわりに

以上のように、プラジュニャーカラのプラマーナの定義の解釈は重層的なもの

で、一旦は第二定義に定義を収斂させる解釈を示しながら、更なる吟味の結果、最終的に第二定義を勝義的プラマーナの定義、第一定義を世俗的プラマーナの定義とする解釈に到達するという論理構造を持つ。その最終見解は唐突なものではない。さらに、第一定義が世俗的プラマーナの定義であることは、第一定義導入の際の説明によって暗黙に前提されていたとも言える。彼の最終見解は、実は PVA 冒頭部分からの必然的帰結でもあったのである。

〈参考文献と略号〉

一次文献 NBT: Nyāyabinduṭīkā in *Pañḍita Durveka Miśra's Dharmottarapradīpa*, 2nd ed. Ed. Dalsukhbhai Malvania, Patna: Kashiprasad Jayaswal Research Institute, 1971; PV: Pramāṇavārttikakārikā, Ed. Yusho Miyasaka, *Acta Indologica* 2 (1971/72), 1–206; PVAo: Motoi Ono, *Prajñākaraguptas Erklärung der Definition gültiger Erkenntnis*, Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 2000; PVin: Dharmakīrti's Pramānaviniścaya, Chapters 1 and 2. Ed. Ernst Steinkellner, Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften / Beijing: China Tibetology Publishing House, 2007; PVP: Pramānavārttikapañjikā: P 5717, Che 1b1–390a8; Y(P): Pramānavārttikālaṃkāraṭīkā Suparīśuddhā nāma: P 5723, Phe 208a7–345a8.
 二次文献 Franco 1997: Eli Franco, *Dharmakīrti on Compassion and Rebirth*, Wien: Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien, Universität Wien; 稲見 1992: 稲見正浩「『プラマーナ・ヴァールティカ』プラマーナシッディ章の研究 (2)」, 『広島大学文学部紀要』第 52 巻; 岩田 2000: 岩田孝「世尊は如何にして公準 (pramāṇa) となったのか」, 『駒澤短期大学仏教論集』第 6 号; 木村 1997: 木村誠司「チベット仏教における「プラマーナの定義」」, 『駒澤短期大学仏教論集』第 2 号; 小野 2012: 小野基「第 5 章 真理論——プラマーナとは何か」, 『シリーズ大乘仏教 9 認識論と論理学』, 春秋社, 所収; 小野 2013: 小野基「pramāṇabhūta の意味の変遷」, 『印度学仏教学研究』第 61 巻 2 号。

〈キーワード〉 pramāṇa, sāmvyavahārika, pāramārthika, Prajñākaragupta

(筑波大学教授, Dr. phil.)